

科学と美術を組み合わせるという試みは、時々行われています。科学者と美術家が語り合うトークイベントや、科学研究にヒントを得て作成される美術作品などがその例。これらの活動の目的もいろいろあって、科学に関心を持ってもらうための入り口として美術を活かす場合もあれば、新しい美術作品を生み出すために科学の成果を使うこともあるでしょう。

科学研究機関に美術家が一定期間滞在して、研究者との交流をもとに作品を作り上げる「アーティスト・イン・レジデンス(AIR)」という試みもあります。巨大な電波望遠鏡を擁する国立天文台野辺山宇宙電波観測所や、東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構(IPMU)でもAIRが実施されています。今回、羽田空港近くのイベントスペースで開催された、IPMUのAIR参加作家展を見てきました。

IPMUでのAIRは、美術家が1か月研究

今月のお題 科学と美術が出会うとき

科学と美術は、いずれもこの世界の一面を切り取って解釈する方法といえるかもしれません。では、それらが出会ったときは?

高梨直紘 (東京大学) /平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

所に滞在するという本格的なもの。そこ に参加された3名の美術家さんたちの 作品が展示されていました。立体造形物、 絵画、映像とかたちはそれぞれで、題材 としたものも「白と里」、多次元時空の計 算方法、太陽観測データとそれぞれ。研 究者との対話の中で美術家さんが感じ 取ったものをそれぞれの観点で消化し て生み出された作品ですので、一見して 科学(あるいは数学)とのつながりがわ からないもの、解釈のしかたがわからな いものもありますが、これもまた組み合 わせの妙なのかもしれません。私はこれ まで科学のトレーニングを受けてきて科 学の世界にどっぷりつかっているので、 「どうしてそうなっているのかを理解した いという思いが先行してしまいます。こ ういうときは制作に携わった方からその 過程や考え方を説明してもらって、その うえでもう一度作品を鑑賞してみます。 すると、おぼろげながら楽しみ方の手が



蒲田の町にとつぜん現れるIPMUのロゴ看板。村山 斉機構長の等身大パネルもインパクト大でした。

かりが得られることがあります。もちろん、 理解できなくて苦しむ場合もありますが、 それはそれ。見る人のバックグラウンド によって、きっと楽しみ方もいろいろある ことでしょう。

科学と美術は、いずれもこの世界の一面を切り取って解釈する行為といえるかもしれません。そこにはそれぞれのやり方があり、ふたつが出会うことによって世界の新しい切り取り方が生まれていることは間違いなさそうです。これが積み重なって世界が少しずつ豊かなものになっていく、そんなきっかけになったらおもしろいですね。